

「世界に伝えたい!!阿波人形浄瑠璃の魅力未来遺産プロジェクト」

プロジェクト未来遺産登録10周年を迎えて

阿波人形浄瑠璃平成座座長 徳島ユネスコ協会会長
藤本宗子(竹本友幸)さんインタビュー

阿波人形浄瑠璃は、徳島県(阿波)で伝承されてきた国の重要無形民俗文化財。その次世代の担い手として、子どもたちの育成に力を注いできたのが平成座です。2013年度には「世界に伝えたい!!阿波人形浄瑠璃の魅力未来遺産プロジェクト」として、プロジェクト未来遺産に登録されました。座長であり、徳島ユネスコ協会の会長も務める藤本宗子さんに、阿波人形浄瑠璃にかける思いを伺いました。(企画広報部)

かけがえのない郷土の芸能を次の世代に

衰 退しつつあった阿波人形浄瑠璃を盛り上げようと、平成座が旗揚げしたのは平成元年(1989)。婦人会の会長をしていた藤本さんの母・幸子さんらが中心となりましたが、人形浄瑠璃についてはまったくの素人でした。それでも、人形遣いのほかに、勢いをなくしていた太夫(語り)や三味線まで加えた画期的な座として誕生したのです。

以来、平成座は研鑽を重ね、1996年には代表的な演目「傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段」だけの全国大会を計画。県内外の19座が、阿波人形浄瑠璃の拠点である徳島県立阿波十郎兵衛屋敷に集結しました。結果は大成功でしたが、一方で、藤本さんは多くの座が後継者不足に直面していることを実感します。

「これからは子どもたちに伝えていかなあかん」

地元小学校の全校児童を対象に、平成座が初めて人形浄瑠璃の授業を行ったのは、その翌年のことでした。

「こんな小さい子にわかるかなあとも思ったのですが、1年は1年なりに、6年は6年なりに感想を寄せてくれました。それを読んで『これならいける!』と、『学校にクラブをつくったら、皆するで(しますか)?』と尋ねたら『はい!』と。それでできたのが川内北小学校人形浄瑠璃クラブです」



「傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段」の母娘を手にする平成座の人形遣いのメンバー。一体の人形を3人で操る。阿波十郎兵衛屋敷にて

子どもたちには手間を惜しまず、愛情込めて

川内北小にクラブができた翌1998年、藤本さんはじめ平成座の太夫・三味線全員が、義太夫節で人間国宝となった淡路島の故鶴澤友路(ともじ)師匠に入門。淡路に通ってさらに稽古を重ね、全員が名前をいただけるまでになりました。(藤本さんの太夫名は竹本友幸)

「仕事や家事、PTA、商工会議所と忙しく、何度もやめようかと思いましたが、でも、師匠が淡路の子どもたちに教えていらした

ので、私たちが師匠の浄瑠璃の心を子どもたちに伝えたいと。座員の皆も仕事などいろいろある中で稽古に来てくれています」

その後、平成座はいくつもの小学校にクラブをつくったほか、地域の枠を超えた平成座ジュニアクラブを設立。出前授業も100回を超えました。また、老人クラブや留学生への指導も行い、国や地域・年齢・性別を超えた幅広い活動で2013年、プロジェクト未来遺産に登録。昨年の10周年記念公演では徳島在住の外国の方々を招待し、人形を操る体験なども好評でした。

「外国の方には難しい日本語でしたが、浄瑠璃の魅力に触れていただけたかな。境をつくらず皆で一緒に、という活動です。中でも、子どもたちは純粋ですから、真髓を見抜きますので侮れません。温かく愛情込めて、ていねいに教える。そういう手間を惜しんだらあかんのです」



週に1度のお稽古風景。子どもが自由に使える人形を用意した

現 在、藤本さんは平成座の座長と徳島ユネスコ協会の会長、2つの立場から子どもたちの豊かな未来を見つめています。未来遺産として100年後の子どもたちに伝えるという使命もあります。

「平成座では広島でも2回公演を行い、被爆樹木を守る活動でプロジェクト未来遺産に登録された団体と交流しました。日本ユネスコ協会連盟には、未来遺産を世界に向けて発信したり、登録団体同士の交流を図ったりと、登録後にもユネスコならではの活動の広がりを期待したいですね」

阿波人形浄瑠璃：その昔、淡路島から徳島に伝わり、村々で庶民の娯楽として受け継がれてきた。いまも県内には全国で最多の農村舞台が残され、人形座や太夫部屋、人形師の数も群を抜いている。

ふじもと・むねこ

(たけもと・ともゆき)

1959年、徳島県生まれ。2001年から阿波人形浄瑠璃平成座座長。竹本友幸の名で太夫を演じる(写真)。2016~2020年、徳島県教育委員。(有)アットホーム藤本材木店専務取締役。徳島商工会議所副会頭。日本ユネスコ協会連盟評議員。2023年から徳島ユネスコ協会会長。

